

伊藤忠兵衛記念館

伊藤忠・丸紅の創始者、初代伊藤忠兵衛の100回忌を記念し、
初代忠兵衛の旧邸、二代忠兵衛の生家である豊郷本家において、
彼等の愛用の品をはじめ、様々な資料を展示。
繊維卸から「総合商社」への道を拓いたその足跡を紹介しています。



●玄関

●炊事場

●土蔵(展示室)

●土蔵内部



実際に使用されていた提灯が出迎えてくれる入口。



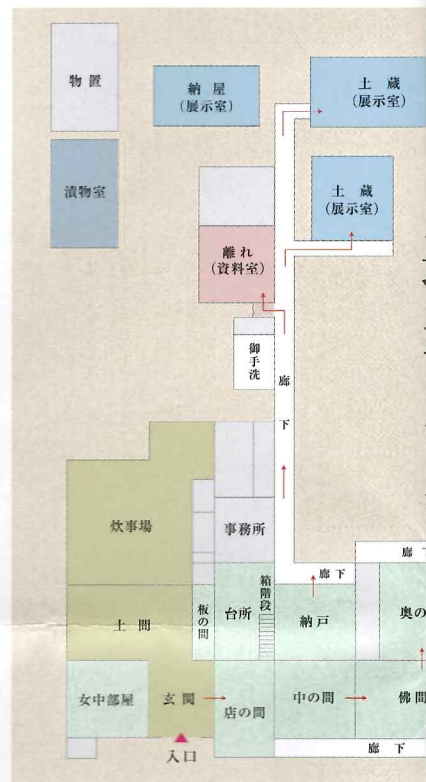
一日中賑やかだった様子が偲ばれる炊事場。



庭の一角にある土蔵。中は展示室になっています。



伊藤家が保存していた貴



●女中部屋

●箱階段

●店の間、中の間

●佛間

●奥の間



女中が起居したり、物置としても使用されていました。



店の間から佛間にかけて、初代及び二代忠兵衛に関する様々な資料が展示されています。



初代忠兵衛のレリーフ

近江商人の筆頭、初代伊藤忠兵衛

1842~1903



天保13年(1842)繊維品の小売業を営む「紅長」の家に生まれた忠兵衛は、15歳で近江麻布の持ち下り商いを始めました。翌、安政6年(1859)には長崎まで足を伸ばし、そこで見た外国貿易の活況に刺激を受けたことが、わが国貿易のパイオニアとして、いち早く貿易業に進出するきっかけとなりました。

初代忠兵衛は、明治5年(1872)に大阪本町に繊維問屋「紅忠」を開設。開店と同時に近代的な経営方針を打ち出しました。第1に「店員の販売権限と義務の明確化」第2に「社内会議制度導入」第3に「利益三分主義(本家・店・店員への配当制度)」第4に「運送保険の利用」第5に「洋式帳簿と学卒の採用」第6に「貿易業への進出」などで、いずれも当時ではきわめて革新的なものでした。

明治36年(1903)61歳で永眠するまでに、伊藤忠本店・伊藤京店・伊藤西店・伊藤糸店・伊藤染工場の5店の事業を残すとともに、近江銀行・川崎造船所・大阪製紙・金巾製織・その他建設、貿易、保険等十数社の事業にも関係していました。また、郷里豊郷村(現豊郷町)の村長も務めるなど郷土人にも愛されていました。これは初代忠兵衛が心から自由を愛し、相手の人々の立場とその思想を重んじたからにはほかありません。

「総合商社」の基盤を築いた二代伊藤忠兵衛



明治36年(1903)に初代忠兵衛が61歳で他界し、その通夜の席で次男・精一が父の跡を継いで二代忠兵衛を襲名しました。この後継者指名を行ったのは、重夫人でした。そして八重は二代忠兵衛に伊藤各店の役職には就かず、丁稚からたたき上げると発表しました。これによって伊藤本店への入店から5年の間、品を担いで訪問する「地方回り」などの下積みを重ね、「帝王学」を学ぶこととなりました。

明治42年(1909)、イギリスに留学した忠兵衛は、外国商館を通さず直接イギリスをすれば、中間の利潤がカットされ日本の国益になることに気が付きます。この経験が、今日の「総合商社」の原点となっています。また留学中は、ドイツ、フランスからも織物を仕入れて日本経由で輸出するなど、初代忠兵衛の持ち下りの国際版として「総合商社」の3国間貿易の草分けとなります。

イギリス留学から帰国した忠兵衛は、本格的な国際化に向けて、海外の営業拠点づくりに奔走しました。初期には、綿布は輸出を柱とし、販路はアフリカ東海岸にまで及び、アメリカから紡績機の輸入も業績を拡大していきます。その後、「伊藤忠商店」は本家の「紅長」と合併、「丸紅商店」が生じ、「伊藤忠商事」、「丸紅」へと発展していきます。

●茶室



様々な品々を展示しています。



2000年に復元された茶室(利用可能)。

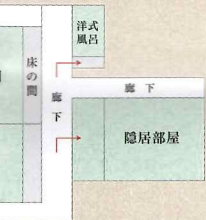


納屋を整備して、新しく展示室が出来ました。

茶室

近江商人、忠兵衛と八重夫人の 当時の暮らしぶりに出会う。

仙道に面して建つ初代伊藤忠兵衛の旧邸は、明治13年に建てられ
伊藤家が生活していた頃そのままの形で残されています。
その中に一步入ると“近江商人”忠兵衛の
生活ぶりの当時の暮らしぶりが偲ばれます。



●隠居部屋



二代忠兵衛直筆の掛軸などがある奥の間。

●洋式風呂



明治40年代につくられた、
当時では珍しい西洋風バスルーム。

1886~1973

17歳の若さ
代々の妻、八
僧抜いで一
得意先に商
りました。
リスと商売
本の「総合
韓国にも輸
ます。大正
どで着実に
れ、現在の

豊郷本家における八重夫人の活躍



明治5年(1872)初代忠兵衛が大阪に店を構えた時から、豊郷本家における初代夫人、八重刀自の目覚ましい活躍が始まりました。

大阪店で使用する江州米や八日市産のたばこの選定、味噌や梅干しの漬け込みをはじめ、毎年夏には大阪店のふとんを江州に持ち帰り、洗濯の上仕立て直ししていました。さらに、大勢の店員の盆、正月の着物の仕立てから下駄の調達まで行き届いた心遣いをしていました。

特筆すべきは、八重刀自が初代忠兵衛の力強いアシスタントとして、江州での近江麻布の仕入れを一手に切り回していたことです。二代忠兵衛は「数万反の麻布を1日に発送するときの総指揮から食事・弁当の準備まで全部母が主宰しておったが、いわゆるケーパブルな人であった。」と回想録の中で述べています。

八重刀自の最も重要な仕事は、新入店員の教育でした。当時伊藤忠本店に見習い店員として採用されると、まず豊郷の本家で1ヶ月、八重刀自からじっくりと店員としての行儀作法や、そろばん等必要な教育をほどこしていました。入店後に店員が問題を起こした場合も、直ちに豊郷本家へ送られ、再教育されるのが常でした。

1849~1952



●初代忠兵衛のレリーフ



●大阪本町の伊藤糸店で
使用されていた木版画ポスター



●明治19年(1886)頃に
使用されていた帳簿類

●明治27年(1894)から
使用を始めた洋式帳簿



●二代忠兵衛の胸像



●二代夫人が持参した産湯道具

●二代忠兵衛が海外から
持ち帰ったステッキ。
海外出張に使用した
バッグや革靴等



●二代忠兵衛の
愛蔵盤が入った
レコードケースと蓄音機



初代忠兵衛が使用していた洋式の帳簿類や二代忠兵衛愛用のステッキなど、当時が偲ばれる貴重な品々が展示されています。



交通機関 ● JR琵琶湖線、彦根駅下車、乗り換え、近江鉄道、豊郷駅下車徒歩約5分
 名神高速道路湖東三山PAスマートICより車で約20分。



伊藤忠兵衛記念館

〒529-1168 滋賀県犬上郡豊郷町大字八目128-1

開館時間 10:00～16:00

休館日 月曜日

入館料 無料

お問い合わせ TEL.0749-35-2001 / FAX.0749-46-5955 (財)豊郷済美会

公益財団法人 豊郷済美会 理事長
 伊藤忠兵衛記念館 館長

伊藤 勲 (伊藤家第四代当主)

大阪企業家ミュージアム

●大阪企業家ミュージアムにも(初代・二代)伊藤忠兵衛の活躍が展示されています。



開館時間 10:00～17:00 (水曜は20:00迄)

※閉館時間より30分前迄入館できます

休館日 日曜・月曜・祝祭日および年末年始・お盆

入館料 大人300円 / 中・高・大学生100円

小学生以下無料(但し保護者同伴)

〒541-0053 大阪市中央区本町1-4-5

大阪産業創造館地下1階(地下鉄「堺筋本町」駅より東へ徒歩3分)

TEL.06-4964-7601

くれなゐ園



伊藤忠兵衛記念館のすぐ近くの「くれなゐ園」は初代忠兵衛の33回忌を記念し、酬徳会が初代忠兵衛の功績を偲んでその生地に建設したものです。園内には彼の肖像をはじめ込んだ碑が建っています。

◆ 伊藤忠兵衛略年表 (1842～1918)

西暦 (元号)	伊藤忠兵衛・伊藤忠の歩み	社会・経済の歩み
1842 (天保13年)	初代 伊藤忠兵衛 滋賀県犬上郡豊郷村八目で出生	
1853 (嘉永6年)	11歳で近村へ行商に出る	アメリカペリー艦隊が浦賀に来航
1858 (安政5年)	15歳にして大阪經由、泉州、紀州へ初めて 麻布の持ち下りをする (この年を伊藤忠商事創業の年次とする)	日米修好通商条約調印
1859 (安政6年)	九州・長崎まで麻布などの持ち下りをする	幕府は神奈川・長崎・函館の3港を開港
1872 (明治5年)	大阪市東区本町2丁目に呉服太物商「紅忠」を創立する	新橋・横浜間に鉄道開通
1875 (明治8年)	店法を改正し「利益三分主義」を成文化する	
1884 (明治17年)	「紅忠」を「伊藤本店」とする	
1886 (明治19年)	羅紗の直輸入を企てるなど多角的な経営を展開する	
1890 (明治23年)	「日本雜貨商社」の株主となり、初めて輸出事業に関わる	
1893 (明治26年)	大阪・本町に伊藤糸店を開業する (伊藤忠商事のはじめ)	日清戦争始まる(1894年) 戦後の好況へ一転して恐慌へ
1898 (明治31年)	月刊雑誌「実業」を発行	
1901 (明治34年)	近江銀行頭取に就任する	東京株式市場大暴落(1900年)
1903 (明治36年)	初代 伊藤忠兵衛逝去(61歳) 次男精一が二代目を相続襲名(17歳)	
1904 (明治37年)	二代 忠兵衛、伊藤本店へ入店、 兵姑部へ配属 本店に輸出部開設	日露戦争始まる 日露講和条約・戦勝景気(1905年)
1906 (明治39年)	韓国への輸出開始 上海に駐在員	
1907 (明治40年)	京城出張所開設	株式市場が暴落し、戦後の恐慌が起る
1908 (明治41年)	店法を改正、伊藤忠兵衛本部を設ける 東京支店を日本橋に開設する	
1909 (明治42年)	伊藤忠兵衛がイギリス留学(1910年10月帰国)	大阪市の大火で11360戸が焼け北部は全滅する
1910 (明治43年)	マニラ出張所、漢口出張所開設 本店全焼 一宮出張所、神戸出張所を設ける	韓国併合宣言を発表、韓国を朝鮮と改め 総督府を置く
1911 (明治44年)	伊藤忠兵衛が結婚	
1912 (明治45年)	綿糸部を新設する	
1914 (大正3年)	個人経営の組織を改め、伊藤忠合名会社を設立する	第一次世界大戦開戦
1915 (大正4年)	天津出張所の開設 本店新築(大阪・本町2丁目)	生糸綿糸布相場が暴落
1916 (大正5年)	青島出張所開設 「調査部時報」の創刊 加工綿布部を設ける	
1917 (大正8年)	伊藤忠兵衛が中国・満州・蒙古を視察 日曜日を休日とする	ロシア革命
1918 (大正7年)	ニューヨーク出張所、カルカッタ出張所開設 伊藤忠商事株式会社創立 店法改訂 年給制から月給制へ移行	連合国が対独休戦条約に調印



初代 伊藤忠兵衛



伊藤糸店(大阪・本町)



二代 伊藤忠兵衛



マニラ支店(ファンルナ街)



伊藤忠本店(大阪・本町)

◆ 伊藤忠兵衛略年表 (1920～1975)

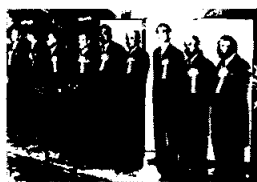
西暦 (元号)	伊藤忠兵衛・伊藤忠の歩み	社会・経済の歩み
1920 (大正9年)	大同貿易設立	株式暴落、恐慌始まる
1923 (大正12年)	関東大震災で東京支店を焼失	関東大震災
1927 (昭和2年)	綿花部を新設、米綿の取扱いを開始 東京支店新築(1928年)	金融恐慌でモラトリアム
1929 (昭和4年)	呉羽紡績設立	ニューヨーク株式暴落
1930 (昭和5年)	10年振りに株式配当	
1931 (昭和6年)	社員数250名になる	満州事変始まる
1932 (昭和7年)	本店新社屋完成	満州国建国 5.15事件(犬養首相暗殺)
1937 (昭和12年)	伊藤竹之助社長就任(1939年)	軍需景気で東京株式市場の取引新記録 日華事変始まる。
1938 (昭和13年)	伊藤忠兵衛が財団法人カナモジカイ会長に就任	
1941 (昭和16年)	三興株式会社発足 (伊藤忠商事、丸紅商店、岸本商店の3社合併)	米英に宣戦
1944 (昭和19年)	大建産業株式会社発足 (三興、呉羽紡績、大同貿易の3社が合併)	
1949 (昭和24年)	大建産業が生産部門と商事部門を分離、 伊藤忠商事、丸紅、呉羽紡績、尼崎製釘所の4社を設立 小菅宇一郎社長就任(1949年～1960年)	1ドル360円の単一為替レート実施
1950 (昭和25年)		朝鮮動乱始まる
1951 (昭和26年)	CIマンスリー創刊 ニューヨーク事務所開設	
1952 (昭和27年)	伊藤忠アメリカ会社設立	GHQ解散 IMFに正式加盟 朝鮮休戦協定
1953 (昭和28年)	ロンドン事務所開設	
1955 (昭和30年)	大洋物産を合併	経済白書「もはや戦後ではない」 神武景気(55年～57年) ナベ底景気(57年～58年) 岩戸景気(59年～61年)
1957 (昭和32年)	伊藤忠兵衛が甲南学園理事長に就任	
1960 (昭和35年)	越後正一社長就任(1960年～1974年) 森岡興業吸収合併(1961年)	東京オリンピック開催 東海道新幹線が開通
1964 (昭和39年)	青木商事を合併	
1967 (昭和42年)	東京支社を東京本社と改称、 大阪本社と2本社制	
1969 (昭和44年)	大阪本社新社屋が完成 『伊藤忠商事100年』刊行	
1970 (昭和45年)		万国博覧会が大阪にて開催される
1971 (昭和46年)	いすゞ自動車と米GM提携を仲介	
1972 (昭和47年)	中国から友好商社に指定される	沖縄が祖国に復帰 円、変動相場制へ移行 第4次中東戦争(オイルショック)
1973 (昭和48年)	二代 伊藤忠兵衛逝去	
1975 (昭和50年)	近親者の手により句集『熱海好日』刊行	



新築された東京支店



三興青年団の戦勝祝賀行進



新経営陣披露パーティ(1960年・大阪)



大阪新本社正面